

フィリピン研修を通して学んだことと感じたこと

生涯スポーツ学部 スポーツ教育学科 3年

私が今回のフィリピン研修を通して学んだことはたくさんありましたが、それをいくつか絞ってまとめていきます。

まず1つ目は現地の人の温かさです。私は今回の研修が始まるまで現地の人たちが私たちを受け入れてくれるのか不安でいました。ですが、島に着いた瞬間から日本ではありえないような、自分は全く見ず知らずの人間なのにも関わらず、一人一人が私たちに挨拶をしてくれたり、声をかけてくれたり、名前を聞いてくれて、その瞬間からぐっと距離が縮まり島民一人一人がそのように私に接してくれたので初日でその不安が吹き飛びました。カオハガン島は全人口が約650人というとてもとても小さな島であり、現地の日本人の方によると世帯数は5、6世帯で島民がほぼ同じ血筋だと教えてくださりました。そこで先に述べた“人の温かさ”や“人々の距離感の近さ”を身に試みて感じました。これは私の推論ですがカオハガン島民は皆家族だという意識があるのではないかと私は感じました。これは私が思う日本人の性格を大雑把にみると対照的で、日本人も温かい人たちが多いと感じることはありますが、今回の経験では「私は私、他人は他人」という感覚を持ったのは確かです。カオハガン島民と、今回であったカオハガン島民ではないフィリピン人とを比べても、カオハガン島民はとても温かく親しみの持てる人たちだったと感じました。更にこの島の人たちは世代を問わず皆と遊ぶ、それは違う家庭でも家族でも関係なくさらに年齢の壁も超えてともに海辺で遊んだり話したり、はたまた裸足でバスケットボールをして遊ぶような日本では考えにくい環境でした。ですがそれと同時に羨ましく、幸せにも感じました。



2 つ目は、日本とは比べて明らかに物や道具が少なくても人々は何不自由なく暮らしていたことに驚きました。研修が始まるまでに私自身がどうしても引っかかっていたことが、ライフラインや“日本人感覚”（もしかすると私の感覚）で最低限必要な物が揃っていないであろうことでした。島民は日本では考えられない原始的な生活をしているのだろうと勝手な想像をしており、正直言って自分にはありえない生活であろうとまで考えていました。ですが蓋を開けてみると島民は物を共有しあったり食材はその日の朝起きてから獲得したり、水道がない代わりに貯めた雨水や海水を使い分けて食器洗いや洗面をするなど、受け継がれてきた“生きるための知恵”を活用して生活をしていました。私たち（少なくとも私）は生活するうえで道具に頼って生きています。これは文化や技術の発展を遂げてきたためでありこのような暮らしにはとても驚きました。島の子は 16 歳頃になると生きる上での技術や知識が全て身に付く、と現地の日本人の方が教えてくださいました。私は今回初めて海外に出たので他の国の文化や習慣、人間性（国民性）などはわからず生まれ育った日本とすべて比べてしまいますが、日本の 15 歳や 16 歳といえばほとんどの子が高校 1 年生あるいは中学 3 年生で部活動や友達と遊んだりアルバイトをするなど、青春の時間を過ごしており、自分で生きるための知恵を身に着けるなど考えることはそうそうないと思います。少なくとも自分はその一人でした。それとは対照的な生活をする島民の方々を目の当たりにしてみて、とても考えさせられるものがありました。（自分は親や周りの人たちに甘えすぎているのではないか）や、もし自分が一人きりになってしまった時に自分は何ができるのであろうかなどと考えましたが、自分なりに答えが何となく見出されました。それは日本とカオハガンの人を比べた時だけではなく、この同じ地球で生きていくうえで人と人のかかわりがなければ生きていくのは難しかったり楽しくなかったり充実しなかったりと様々あるかと思いますが、人と人との支えあいがあってこそ、人は生きていけるのではないのではないかという結論に至りました。だからこそ私は今回の研修で人と人との本当の“繋がり”の大切さ、ありがたさや重要性、人生にもたらす幸福など様々なことを肌で感じ自分自身実践して笑顔をもたらし、そこで自分も笑顔や幸せをもらいたいと思いました。

3 つめは、違う言語を持った人ともコミュニケーションが取れて、気持ちをつなげることができるといことです。研修前は海外の人たちとコミュニケーションが取れるかが不安でした。新千歳空港を飛び立ち、大韓空港から韓国へ向かい、さらにそこから乗り換えてセブに向かい、セブで一泊してようやくカオハガンに到着するという長い道のりがありました。その長い道のりの中ですでにたくさんの人と会話し、英語、韓国語、タガログ語、ビサヤ語とすこしずつではあるものの 4 つ

の言語に触れることができました。言葉やボディーランゲージを使えば人ともコミュニケーションができると分かり、海外での不安が少しなくなりました。最近の海外のニュースでは物騒なニュースや海外へ足を運ぶには気持ちの曇るようなニュースをよく目にしますが結局同じ人であってニュースで取り上げられるのは一部の人であり、それに巻き込まれてしまっただけでは最後となるかもしれませんがまず自分が動かないことには何もわからないことに改めて気が付きました。「百聞は一見に如かず」です。今回カオハガン島に出向いて、本当に温かい人たちばかりでホームステイでは家族のように出迎えてくれ、ご馳走してくれて島のことや島の習慣歴史など様々なことを教えてくれました。カオハガン島の人たちは比較的若い30代くらいまでの人は英語を学校で習っているようで、英語を使ってコミュニケーションが取れましたがそれより上の世代になるとビサヤ語とほんの少しの英語を喋れる人たちが多くなりコミュニケーションをとるのは難しかったです。その中でも一生懸命伝わる言葉を探して言葉を選び何とか会話ことができました。それに満足することなく自分ももっと英語や、今回ではタガログ語やビサヤ語を勉強しておけばもっともっとより多くコミュニケーションや会話ができたことを考えるととても後悔しました。自分は何となく就職してからは海外も視野に入れることのできる仕事があったらと思っていますがとても今までの自分の考えでは甘いと感じました。国内にいる間はあまり機会がないかもしれませんが、もし英語やその他の言語を使う場面になったときに、話せない自分自身悔しいうえにもったいないと感じたのでこれから上手に使って少しずつ勉強していきたいと身をもって感じました。

4つ目はこれもまた比較した話になりますがフィリピン（カオハガン）と日本を国として、発展の度合いを比べてみると同じアジアと思えないくらい日本が発展していたことです。これはフィリピンと日本を比べる以前に多くの海外の国とも関連すると思いますが日本のように水道水を飲むことができる国は数少ないと思います。その他にも日本では、道路がほとんど整備されてガタガタの道がほぼなかったり、看板にこの方向に進むとXXに行けて右または左に曲がるとXXに行けるなどわかりやすく案内の看板が出ていたり摘み上げるとキリがなくなりますが、とにかく日本は衛生面やほかの観点からみても安全ということを感じました。研修中体調管理のために常備薬をもって研修に臨みましたが、外国人の方が日本に旅行に来る際には恐らくですがその心配はないのではないかと思います。体調の心配をして研修に臨みましたが研修中、体調はすこぶる良好で自分でも驚くほどでした。が、案の定帰国後にお腹を壊し2日ほど家に籠らざるを得なくなりました。今回の研修であらためて日本の良さに気が付きましたがその体験も含めて海外にもっともっと行き、

様々なことを吸収したいと思いました。

この研修をまとめてみると、研修中は時間の流れがとても遅く何も考えなくとも時間が流れていくようなカオハガン島でしたが振り返ると学ぶことがとても多く自分の身になる研修にすることができたと感じています。私は年度が替わって4年生になり就職活動に励むこととなりますが、やはり今回の研修でより一層海外への意識は強まりましたのでそれを念頭に置いて就職活動に励みたいと思います。今回この研修に参加しようと思ったきっかけは、私のゼミの先生による声掛けから研修を発見したことに寄るのですが、そのタイミングというのも今回の出会いも全て何かしらのめぐりあわせなのではないかと感じています。この大学に入らなければ恐らく参加できなかったであろうこの研修も、この大学で出逢い同じ時を過ごした人たちとも全て巡り合わせなのであろうと改めて考えさせられました。だからこそその人たちや今まで自分を支えてくれた人、かかわってくれた人たちに感謝をしてこれから過ごしていきたいと思いました。この素晴らしい研修にこれからも多くの生徒が参加し人の温かさや様々吸収し自分のために役に立つような機会にしてもらえたらと思います。できることならば自分ももう一度この研修に参加して島の人たちと同じ時間を刻みたいと思いました。とても貴重な時間を過ごせたことを感謝しています。

